

令和 6 年 4 月 26 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00439

研究課題名（和文）ロマン主義時代の文学作品に見られるウォレン・ヘースティングズ表象

研究課題名（英文）Representation of Warren Hastings in Romantic Literature

研究代表者

鈴木 美津子（Suzuki, Mitsuko）

東北大学・国際文化研究科・名誉教授

研究者番号：60073318

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の主な成果は、インドの支配体制を樹立し、帝国建設の最大の功労者であったが、総督在任中のインド統治が過酷であったと批判され、1788年に弾劾に付されたWarren Hastings（1732-1818）に着目し、ロマン主義時代の小説、戯曲などにおいて、Hastings自身、弾劾裁判、東インド会社（Hastingsが最高責任者を務める）、ネイボブ（Hastingsもその一人である）などがいかに表象されているのかを、仇敵Edmund Burkeの弾劾演説、インド史、旅行記など多様な言説や諷刺画を援用して仔細に分析し、次いで、表象の背後に潜む政治意識、民族意識、宗教意識を明確にしたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的そして社会的意義は、Hastingsが言及されているロマン主義時代の作品を取り上げ、弾劾裁判の演説集、Frances Burneyの弾劾裁判傍聴記、政治論評、インド旅行記、インドの歴史書などの当時の様々な言説やJames Gillrayなどの諷刺画などに目配りしつつ、Hastingsにまつわる表象を分析したことである。新しい切り口で領域横断的に、文学作品に見られるHastings表象を考察する本研究は意義ある試みであると思われる。さらに言えば、本研究はロマン主義時代の文学研究に貢献するものであり、本研究によりこの時代の小説や戯曲の作品理解がより深化し、明確になるものと思われる。

研究成果の概要（英文）： Warren Hastings (1732-1818) is the first Governor-General of India (1774-1784), and is later impeached for corruption, but acquitted after a seven-year trial. The purpose of the present research project is to illustrate how he is represented in the Romantic Literature, such as Phebe Gibbes's Hartley House, Calcutta (1789), Richard Sheridan's Pizarro (1799) and others. First, I located the novels in which Hastings was mentioned, depicted, and referred to, within the context of politics, culture, and religion at the end of the eighteenth and the beginning of the nineteenth centuries. Second, I examined the way Hastings was represented in the Romantic Literature, in terms of his impeachment trial (1788-95), the East India Company he served for a long term, and Nabob who Hastings himself was typical of. Third, I investigated writers' political, racial, and religious consciousness latent in their works, for which their representation of Hastings provided clues.

研究分野：英米文学

キーワード：ウォレン・ヘースティングズ 東インド会社 ネイボブ エドモンド・バーク 植民地支配 ロマン主義時代の英国小説 ロバート・ベイジ エリザベス・ハミルトン

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究開始当初の背景は、次の通りである。当時は、ロマン主義時代の文学作品に見られる Warren Hastings (1732-1818) 表象を考察した著作、論考は数えるほどしかなかった。Jeremy Bernstein による Hastings の詳細な伝記 *Dawning of the Raj* (2000) は、Frances Burney の裁判傍聴日記を詳細に分析しており本研究にとって有益であるが、文学作品に見られる Hastings 表象に関する考察はない。Peter J. Marshall の *The Impeachment of Warren Hastings* (1965) と Nicholas B. Dirks の *The Scandal of Empire* (2006) は、弾劾裁判 (1788-95) を綿密に検証した優れた著作であるが、Hastings 表象に関するまとまった議論はない。Conor Cruise O'Brien の “Warren Hastings in Burke’s Great Melody” (1989) は、Edmund Burke (1729-97) の演説に内在する Hastings 表象を分析した刺激的な論考であるが、他の作家についての言及はない。Sara Suleri は力作 *The Rhetoric of English India* (1992) において、Richard Brinsley Sheridan の *Pizzaro* (1799) の緻密な分析をおこない、Kate Teltcher は、*India Inscribed* (1995) において弾劾裁判や詩に見られるネイボブ (Nabob) 表象を丁寧に論じているが、小説や戯曲に対する言及はない。Felicity A. Nussbaum は、*Torrid Zones* (1995) において、弾劾裁判が Phebe Gibbes や Elizabeth Hamilton の作品に与えた影響について、示唆的な指摘をしている。Julia M. Wright は、*Ireland, India and Nationalism in Nineteenth-Century Literature* (2007) において Maria Edgeworth と Mathew Gregory Lewis に関する有益な考察をおこない本研究に資する所が大いにあった。国内では応募者の研究発表、論文以外には本研究のテーマを包括的に扱ったものはまだ出ていない。

(2) 研究の動機、着想に至った経緯は、次の通りである。「ロマン主義時代における国民小説の誕生とその変容」(基盤研究(C)平成23年～平成26年)そして「ロマン主義時代の英国小説に見られるインド表象」(基盤研究(C)平成26年～平成30年)という研究課題に取り組んでいた際に、インドを舞台にした国民小説や歴史小説そして風俗喜劇などにおいて、Hastings 本人、Hastings の弾劾裁判、Hastings が最高責任者を務めた東インド会社、Hastings もその一人であるネイボブ、がさまざまに表象されていることに興味を覚えた。Hastings が描かれているロマン主義時代の作品を渉猟し、分析を重ねた。応募前に、本研究の準備段階として、学会発表を2回と論文3本を執筆した。「ヘースティングズ裁判とロマン主義時代の女性作家」においては、Gibbes と Hamilton のインドを舞台にした作品を取り上げ、両作品とも、東インド会社の功績を称え、Hastings を擁護し、帝国主義的な進出に積極的に賛成している作品であると結論づけた。この発表に加筆修正を施して、2つの論文にまとめた。「フィービ・ギブズの『カルカッタのハートリー館』とヘースティングズ弾劾裁判」と「エリザベス・ハミルトンの『あるインド貴族の翻訳書簡』とヘースティングズ弾劾裁判」である。また、「ファニー・バーニーの戯曲『忙しい一日』とヘースティングズ弾劾裁判」という題のシンポジウム報告では、Burney が戯曲の中で一貫して Hastings を擁護を仄めかしており、弾劾裁判で仇敵 Burke によって貶められた Hastings の名誉回復を試みていること、Burney がトーリー党の主張に全面的に賛同していることを指摘した。この報告は「ファニー・バーニーの『忙しい一日』とヘースティングズ弾劾裁判」としてまとめた。

2. 研究の目的

(1) 申請時における当初の研究目的は、Elizabeth Inchbald の笑劇 *Mogal Tale* (1784)、戯曲 *Such Things Are* (1787)、Martha Sherwood の小説 *The History of George Desmond* (1821)、Robert Bage の小説 *Mount Henneth*、Sheridan の戯曲 *Pizzaro* などを初めとするロマン主義時代の小説や戯曲において、Hastings 弾劾裁判、東インド会社、ネイボブ等の Hastings に纏わる事象がいかに表象されているのかを検証し、弾劾裁判の演説集、Burney の弾劾裁判傍聴記、*Gentleman’s Magazine* などの政治論評、インド旅行記、インド史などの当時の様々な言説や James Gillray、Thomas Rowlandson の諷刺画などに目配りしつつ、表象の形成に強い影響を及ぼしたと推測される作家の政治意識、宗教意識、民族意識などを解明することであった。

(2) 本研究の目的は、学術背景も含めてより具体的に詳細に述べると、次のようになる。18世紀末から19世紀初頭にかけて、イギリスでは Hastings の弾劾裁判、ネイボブ問題、東インド会社の統治、ヴェロールの反乱 (1806) などを巡って様々な議論が巻き起こっていた。とりわけ、Hastings の弾劾裁判は政治的見世物の様相を呈し、王族から一般庶民に至るまであらゆる階級の人々が裁判の傍聴に訪れた。Hastings が有罪か否かに関しては、国会の場のみならず、詩、小説、戯曲、政治論評、雑誌記事などの場においても、熱烈に議論がなされた。Burke や劇作家で政治家の Sheridan などのホイッグ党員は、東インド会社の最高責任者 Hastings を殺人者、強奪者、略奪者、圧制者と呼んで、激しく糾弾した。弾劾の先頭に立った Burke は、Hastings を植民地インドにおける腐敗墮落の象徴と見なし、「インドにおけるあらゆる虚偽、あらゆる公金横領、あらゆる暴力、あらゆる圧制がこの人物 [Hastings] の中に勢揃いしております」と雄弁を振るった。Mariana Starke は、戯曲 *Widow of Malabar* (1791) において、東インド会社が植民地支配下にあるインドから搾取、強奪を貪欲におこなっていることを批判し、Hastings の道義的責任を追求した。

Sheridan は戯曲 *Pizzaro* の中で、Burke がモデルの宣教師 Las Casas に Hastings を想起させるスペイン軍人 Pizzaro を激しく攻撃させ、植民地支配の悪を糾弾した。

首相 William Pitt (1759-1806) が率いるトーリー党陣営は、Hastings を、大英帝国を救った英雄、インドの救世主、高潔な愛国者として賞賛し強力に擁護した。小説家や劇作家も Hastings 擁護に乗り出す。たとえば、Gibbes は、弾劾裁判開始の翌年に出版した書簡体小説 *Hartly House, Calcutta* (1789) において、Hastings は Burke が批判するような極悪非道の悪人ではなく、有能な植民地行政官であるだけでなく、質実剛健で聡明な東洋学者でもあると主人公 Sophia に言わせ、Gillray の諷刺画に記された文言をそのまま用いて、弾劾裁判は Hastings に対する Burke 一派の「嫉みと悪意」から生じた誹謗中傷事件であると仄めかす。また、Hamilton は、書簡体小説 *Translation of the Letters of a Hindoo Rajah* (1796) において、主人公の Zaarmilla に、Burke を想起させる登場人物を「精神の破綻者」、その演説は「狂乱の発作」であると述べさせて、Burke を徹底的に揶揄し笑いのめす。Hamilton は Hastings をムガル帝国の専制的な軔からインドを解放した救世者と見なし、インド古来の体制、伝統、文化を取り戻すことに貢献した優れた東洋学者であると賞賛する。さらに、Hastings と個人的に親交のあった Burney も風俗喜劇 *A Busy Day; or, An Arrival from India* (1800) において、高潔で清廉、慈愛に満ちたネイボブや眉目秀麗の東インド会社社員を登場させることによって、ネイボブや東インド会社の東大英帝国に対する貢献を褒め称え、弾劾裁判で Burke に貶められた Hastings の名誉挽回を図ろうとする。ようするに、上述の3人の女性作家は、政治的にトーリー党に近い立場に立っており、インドへの帝国主義的進出を擁護し、インドにおける植民地支配を正当化し、Hastings を帝国建設の最大の功労者として祭り上げた。本研究では、当時の作家たちが、作品の中で、自己の政治的・民族的・宗教的な信条に従って、Hastings を巡る激烈な思想の戦いを繰り広げていたことを跡付けることも目指した。

3. 研究の方法

(1) Hastings 弾劾裁判に言及している小説や戯曲、関連する演説集、当時の旅行記、歴史書などは、現在ほとんど絶版状態になっており入手不可能であった。そこで、紙幅の関係上、初年度の例を挙げれば、以下の文献を大英図書館、ロンドン大学図書館、ケンブリッジ大学図書館、オックスフォード大学図書館などから、フォート・コピー、マイクロ・フィルム、あるいはPDFの形で取り寄せた。Robert Bage, *Mount Henneth* (1782); Frances Burney, *The East Indian* (1782); Anon. *The History of the Trial of Warren Hastings* (1796); Elizabeth Lefanu, *The India Voyage* (1804); Robert Orme, *Historical Fragments of the Mogul Empire* (1805); Eliza Fay, *Letters from India* (1816); Anon. *Civilization, or The Indian Chief and the British Pastor* (1818). なお、18世紀関係の文献は、作品によっては ECCO (Eighteenth-Century Collection Online) にアクセスし、USB メモリーに蓄積し、プリントした。

(2) 取り寄せたマイクロ・フィルムなどを製本し、読みやすい形にした。

(3) 製本した作品、および関連文献を精読した。

(4) 分析結果をカードに取り、必要に応じてコンピューターにデータを入力した。

(5) 小説に潜む政治意識、宗教意識などを炙り出すために、同時代に刊行されたインド旅行、弾劾裁判の記録、インド史などの著作を入手し、精読、分析した。

(6) 最終年度には、この4年間に得た成果を基にして、これまで断片的に捉えられてきた当時の作品を、新たな統合的な視点で読み解くことにより、ロマン主義時代の錯綜する小説群・戯曲群にある種の見取り図を提示することを試みた。

(7) 得た知見を所属している学会で発表し、その後論文にまとめた。

4. 研究成果

(1) ロマン主義時代に刊行された作品のうち、Burney、Gibbes、Inchbald、Hamilton、Edgeworth等の作品の分析は、応募時点ですでに終えていた。主な研究成果は、まだ論じていなかった、Bageの *The Fair Syrian* (1787)、*Mount Henneth*、Gilbert Imlayの *The Emigrants* (1793)、Sydney Owensonの *Woman; or, Ida of Athens* (1811)、*O'Donnel* (1814)、Thomas Mooreの *Lala Rooke* (1817)などの作品を取り上げて、それぞれの作品をロマン主義時代の文化的、政治的、宗教的な文脈の中に位置づけ、各作品の中に見え隠れする Hastings に纏わる事象を明確化したことである。

本研究の遂行過程で得た知見の一端は、以下5篇の論文にまとめた。「イムレイの『移住者』に見られるアメリカ表象」(2022)では、イギリスの植民地支配下から脱したアメリカが、『移住者』においていかに表象されているのかを考察し、アメリカ表象の特異性を指摘し、次いで作品に潜む政治的意図を明らかにした。「『オドンネル』に用いられた文学戦略 国民小説に潜む歴史小説の断片」(2022)では、イギリスの植民地支配下にあるアイルランドを舞台にした小説を執筆する際に作家が取らざるを得なかった文学戦略を分析し、ホイッグ党支持者の Owenson が抱く政治意識を検証した。「ロバート・ベイジの『ヘネス山』に見られる異国表象 インド亜大陸と北アメリカ植民地を中心に」(2021)では、イギリスの植民地支配下にあるインド亜大陸と北アメリカ植民地の異国表象に焦点を当て、Bage の政治意識を考察した。「オーエンソンの『女性、あるいはアテネのイーダ』に描かれたオスマン帝国支配下のギリシア」(2020)では、当時は東洋と見なされていたギリシアとギリシアを植民地支配下に置いていたオスマン帝国のそれぞれの表象の背後に潜む作家の政治意識を検証した。「ロバート・ベイジの『美しきシリア人』に見られる異国表象 北アメリカ植民地、アイルランド、フランス、オスマン帝国」

(2019)では、Hastingsの支配したインド亜大陸と類似した状況にあった北アメリカ植民地の異国表象に着目し、Bageの政治的意図を明らかにした。

研究発表は4回行った。「『オドンネル』に用いられた文学戦略 国民小説に潜む歴史小説の断片」(2021)、「オーエンソンの『アテネのイーダ』に描かれたギリシア、オスマントルコ」(2019)、「ロバート・ベ イジの『ヘネス山』に見られる異国表象 インド亜大陸と北アメリカ植民地」(2019)は、それぞれ論文、 、 の基になったものであり、内容は上述の通りである。「トマス・ムーアの『ララ・ルーク』に見られるインド表象」(2019)では、『ララ・ルーク』におけるインド表象を手掛かりにして、Mooreがインドに対する帝国主義的侵略を、どのように捉えていたのかを考察した。

(2) 本研究の学術的独自性とインパクト

本研究の学術的独自性は、ロマン主義時代に刊行された、膨大な作品群の中から、Hastingsが言及されている作品を選び出し、Hastings弾劾裁判、東インド会社、ネイボブなど、Hastingsに纏わる事象がいかに表象されているのかを仔細に分析し、表象の形成に強い影響を及ぼしたと推測される作家の政治意識、宗教意識、民族意識などを解明し、ロマン主義時代の作家たちが、個々の作品の中で、Hastingsを巡って、激しい思想の戦いを繰り広げていたことを跡付けたことにある。このような研究は国内外において、まだ出ていない。新しい切り口で、領域横断的に、文学作品に見られるHastings表象を考察した本研究は、ロマン主義時代の文学研究に大きなインパクトを与える意義ある試みである。

(3) 今後の展望としては、以下の通りである。本研究遂行中に渉猟した作品群の中に、主人公や重要な役割を果たす脇役がアイルランド、インド、フランス、中近東、北アメリカ植民地などに旅する場面やエピソードがしばしば描かれていることに気がついた。中でも、北アメリカ植民地が実に多彩に描かれていることに興味を覚えた。アメリカ独立戦争(1775-83)、アメリカへの移住・移民(最盛期は1790年代)、アメリカ先住民、英米戦争(1812-15)、自然風物などが、作家の政治的、宗教的、民族的信条によって様々に変容されて表象されていることに面白さを感じた。今後は、Hastings表象を分析した際に得た新たな知見を生かして、ロマン主義時代の小説に見られるアメリカ表象の分析に本格的に取り組んでみたい。

5. 主な発表論文

次頁の通りである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 鈴木美津子	4. 巻 第46
2. 論文標題 「ギルバート・イムレイの『移住者』に見られるアメリカ表象」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『日本ジョンソン協会年報』	6. 最初と最後の頁 11 - 16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木美津子	4. 巻 第16
2. 論文標題 「『オドネル』に用いられた文学的戦略 国民小説の周縁に潜む歴史小説の断片」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『ジェイン・オースティン研究』	6. 最初と最後の頁 31-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木美津子	4. 巻 第28号
2. 論文標題 「ロバート・ベイジの『ヘネス山』に見られる異国表象 インド亜大陸と北アメリカ植民地を中心に」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『英国小説研究』	6. 最初と最後の頁 5 - 28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木美津子	4. 巻 第7号
2. 論文標題 「オーエンソンの『女性、あるいはアテネのイーダ』に描かれたオスマン帝国支配下のギリシア」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『東北ロマン主義研究』	6. 最初と最後の頁 17 - 31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木美津子	4. 巻 第27号
2. 論文標題 「ロバート・ベイジの『美しきシリアの人』に見られる異国表象 北アメリカ植民地、アイルランド、フランス、オスマン帝国」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『英国小説研究』	6. 最初と最後の頁 1 - 28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 鈴木美津子
2. 発表標題 「『オドネル』に用いられた文学戦略 国民小説の周縁に潜む歴史小説の断片」
3. 学会等名 日本オースティン協会第14回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木美津子
2. 発表標題 「オーエンソンの『アテネのイーダ』に描かれたギリシア、オスマントルコ」
3. 学会等名 東北ロマン主義文学文化研究会第14回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木美津子
2. 発表標題 「ロバート・ベイジの『ヘネス山』に見られる異国表象 インド亜大陸と北アメリカ植民地」
3. 学会等名 第77回「中東」表象研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木美津子
2. 発表標題 「トマス・ムーアの『ララ・ルーク』に見られるインド表象」
3. 学会等名 第83回「中東」表象研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------